

特別活動の課題

— 国際バカロレア CAS との比較から —

Issues of Special Activities: from a Comparison with International Baccalaureate CAS

本 多 舞
HONDA, Mai

Abstract

The purpose of this paper is to examine recommendations for overcoming the challenges of special activities in upper secondary schools through a comparison of special activities and International Baccalaureate CAS.

First, based on previous research, the challenges of special activities in upper secondary schools will be clarified. Next, the characteristics of the current special activities and the CAS will be summarized, and the similarities and differences between them will be clarified. Finally, we will discuss the prospects for overcoming the challenges of special activities by taking advantage of the features of CAS.

From a comparing special activities and CAS with a focus on learning objectives and assessment methods, it was confirmed that CAS has clearly defined learning outcomes and tools for students to visualize their achievements. It is also clear that the system allows students to visualize their learning and check their own growth process by creating a portfolio.

As a future prospect for special activities, we believe that clarifying the learning outcomes of activities and visualizing learning outcomes, as in the case of CAS activities, will help increase students' awareness and motivation. It is also expected that summarizing, presenting, and recording learning from student council activities and school events will allow students to reflect on their activities and make use of them in their next activities.

キーワード：国際バカロレア、特別活動、CAS、高等学校

1 はじめに

高等学校における特別活動は、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事から構成されている。異なる集団での活動を通して、生徒が協働性や他者を認め合うことを目的として実践されてきた。高等学校学習指導要領（平成30年告示）によれば、特別活動は「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す」（p.11）教育活動である。前回の学習指導要領からの改善点として、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」

を3つの視点を踏まえること、ホームルームや学校の課題を見だし、話し合って合意形成し実践すること、主体的に組織をつくり、役割分担して協力し合うことの重要性があげられた。

近年、特別活動の実践は世界でも TOKKATSU として注目され、日本式教育への関心が高まっている。例えばエジプトでは、アラブの春以降、政治不安や経済状況の悪化に直面し、国の将来を担う子どもの教育が課題だった。その後、独立行政法人国際協力機構（JICA）とエジプト教育・技術教育省が話し合い、小学校で手洗い、日直当番、掃除といった日本で実践されている活動を導入した学校がある（杉田 2018）。インドネシアでは、給食当番制度を取り入れた学校があり、子どもたちを競わせて優れた子どもを賞賛する教育を行っていたモンゴルでは、優れた子ども以外の自己肯定感・自己有用感を

伸ばすべく特別活動を参考に突破口を見い出そうとしている(山田 2023)。また、給食を食べる前に全員が手を洗うことや、当番を設けて責任感やリーダーシップを養うことで、規律や協調性を育む効果をあげていることが報告されている。TOKKATSUの導入は、多文化・他民族国家だからこそ多様性を受容し、共生・協働する考え方や行動力を育むことが期待されている(杉田 2018)。

このように、日本の特別活動はTOKKATSUとして海外展開するようになり、活動の効果として道徳心・規律・協調性・主体性・自己肯定感などの育成が期待されているが、日本の特別活動に目を向けると、効果的な評価のあり方や各教科との連携といった課題を抱えている(城戸 2018)。

特別活動は、国際バカロレアのディプロマ・プログラム(以下DP)のコア科目の1つである創造性・活動・奉仕(Creativity, Activity, Service: 以下CAS)と親和性があるといわれる。多文化社会においては、集団行動と実践的活動を特徴とする特別活動の役割は大きいとされるが(末永 2010)、それは体験的学習を通して協働性や他者を尊敬・受容することを目指すCASも同様である。また、全人教育を柱として思いやりや信念をもち、バランスのとれた人間形成を育む点も両者に当てはまる。また、両者とも点数化されない卒業必修要件であることも共通している。

そこで本稿では、特別活動と親和性のあるCAS活動の概要を整理し、特別活動との比較を通して特別活動の課題を乗り越える方策について検討することを目的とする。

2 先行研究の検討

特別活動に関連する先行研究は多く、特別活動の課題について明らかにしている研究もある。磯島(2014)は、大学生への調査から、学生の多くは高校時代に最も楽しかった思い出として修学旅行や文化祭などをあげているが、これらが特別活動に含まれる活動とは認識できていないと指摘している。渋谷(2013)は、特別活動とCASの比較を通して、CASが実社会との関連を重視していることに鑑み、特別活動の学びを校内のみにとどめるのではなく、実社会と関連付けていく発想が有効ではないかと論じている。近年、PISAの学力調査結果から日本の子どもの学力低下が指摘され、教科の授業時間数確保の推進から、文化祭などの学校行事時間や生徒会活動を減らしてしまう学校もあるが、大谷(2017)は学校生活を豊かにするために特別活動時間の確保は必然であると述べている。また、特別活動では多様な他者との協

働や、主体的に集団や社会に参画することが目指されるが、体験から学びとる深い思考力を持ち合わせなければ、学びが薄まる危険性も指摘されている(遠藤 2019)。

CASについての先行研究は、近年蓄積を重ねつつある。桐生(2017)は、DPを導入した一条校の生徒への聞き取り調査から、CAS活動を体験したことで①CAS活動を楽しみながら取り組む生徒が増えたこと、②活動の質が単発的なものから自発性、継続性、教科横断性を意識した活動に変化したこと、③大学入試にアピールできる活動となったこと、の3点をCASの効果として明らかにした。一方、CAS活動が点数化されないことから、ほとんど何もしない生徒が存在している点や、教員間の意識の差について指摘している。また、生徒の語りから、CAS活動から教科外の学びや社会とのつながりをもつこと、自己成長や振り返りの重要性を得られることが明らかにされている(渋谷 2014)。CASはDPの核心に位置づけられるため、時間的余裕をもって取り組めるよう、高等学校の教育課程を再考すべきという指摘もある(矢野 2012)。

これらの先行研究から、生徒の特別活動への正しい理解、特別活動の時間数削減や軽視化、校内にとどまらない活動内容の構築、思考力の必要性などの課題が出された。

3 国際バカロレアについて

3-1. 国際バカロレアの成立

第二次世界大戦後、新しい時代に向けた国際的視野を持った人材育成が求められるようになり、特に経済・産業分野での国際化が進み、外交官や国連職員、企業で海外駐在する人々が増加した。これに伴い、海外に住む生徒や海外から帰国した生徒が増え、ヨーロッパ諸国のインターナショナルスクールには様々な国籍の子どもが集まるようになる。世界初のインターナショナルスクールとして、1924年に設立されたジュネーブ・インターナショナルスクールでは、すでに様々な国籍の児童・生徒が在学していた。そのため、生徒の進学希望先によって4つの小グループ(イギリス、フランス、スイス、アメリカ)に分け、各国の大学入学に必要な試験対策を行っていた(Peterson 1987: 17)。戦後の国際化に伴い、在学する児童・生徒が多国籍化したことで、より多くの国に合わせた試験対策を準備する必要が出てきたが、教員がすべての国の入学資格に対応することに困難を伴うようになった。

もう一つの背景として、国際民間教育機関であるUnited World Collegeが1962年に設立したAtlantic

College では、世界から選抜された高校生に寄宿舎生活（高校2～3年生の2年間）を通して、国際的視野をもった人材育成を目指していた。しかしながら、英語圏以外の生徒や教員にとって、外国語である英語での試験準備を行うことは困難かつ不利であったこと、イギリスの大学入学資格（G.C.E A-Level）が他のヨーロッパ諸国で通用しなかったこと、イギリスの社会科を他国の生徒が学ばざるを得ないカリキュラムであったことから、新しいカリキュラムの開発が望まれるようになった（Peterson 1987：17）。

このような課題から、生徒がどの国の大学にも円滑に進学できるよう、国際通用性のある中等教育修了証及び大学入学資格が求められるようになる。そこで、ユネスコの協力のもと、ジュネーブ・インターナショナルスクールの教員や大学教員らが中心となり、新しい教育プログラムの開発に従事した。そして、1968年にスイスのジュネーブで設立された非営利団体の国際バカロレア機構が運営する国際教育プログラムとして、国際バカロレア（International Baccalaureate：以下IB）が成立したのである。IBは、基本理念を「全人教育（人間がもつ諸資質を全面的かつ調和的に育成する教育）」とし、世界共通プログラムとして考案した。また、国際的に通用する大学入学資格（IB資格）を授与することで、生徒が希望する国の大学進学ルートを担当する制度を確立した。

3-2. IBのプログラムについて

IBの成立当初は、大学入学資格の担保に重点が置かれていたため、後期中等教育のプログラムとして考案されたが、現在は3～12歳対象のプライマリー・イヤーズ・プログラム（PYP）、11～16歳対象のミドル・イヤーズ・プログラム（MYP）、16～19歳対象のディプロマ・プログラム（DP）とキャリア関連プログラム（CP）の4つのプログラムから成る。本稿ではDPのカリキュラムを研究対象とすることから、DPのみを扱う。

IBでは、育成したい人材を「IBの使命」と「IBの学習者像」（表1および表2参照）で示しており、どのプログラムもこれらを重視している。

このように、IBプログラムでは世界平和のために貢献できる人材育成として、異文化理解や生涯学習者であることを重視している。また、「IBの学習者像」は「IBの使命」を具体化し、IBが考える国際的な視野をもつために重視される資質・能力を10の人物像として示している。

3-3. DPのカリキュラムについて

ここでは、本稿で述べる日本の高等学校段階に対応するDPのカリキュラムについて整理する。日本では、DPは高校2～3年生の2年間で取得するカリキュラムとなっている。所定のカリキュラムを履修し、最終試験を経て所定の成績を取めると、世界共通の大学入学資格であるIB資格が取得可能となる。原則として、英語・フランス語・スペイン語での実施だが、IB機構と交渉

表1 IBの使命

<p>国際バカロレア（IB）は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。</p> <p>この目的のため、IBは、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。</p> <p>IBのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。</p>

IB機構（2015a）より引用

表2 IBの学習者像

探究する人	心を開く人
知識のある人	思いやりのある人
考える人	挑戦する人
コミュニケーションができる人	バランスのとれた人
信念をもつ人	振り返りができる人

IB機構（2015a）より引用

表3 DPのカリキュラム

グループ名	科目例
1 言語と文学 (母国語)	言語 A：文学、言語 A：言語と文学、文学と演劇 (SL のみ) (※)
2 言語習得 (外国語)	言語 B、初級言語 (SL のみ)
3 個人と社会	地理、歴史、経済、ビジネスと経営、情報テクノロジーとグローバル社会、哲学、心理学、社会・文化人類学、世界の宗教 (SL のみ)、グローバル政治
4 理科	生物、化学、物理、コンピュータ科学、デザインテクノロジー、スポーツ・エクササイズ・健康科学、環境システムと社会 (※)
5 数学	数学：解析とアプローチ、数学：応用と解釈
6 芸術	音楽、美術、ダンス、フィルム、演劇
コア科目	
課題論文	知の理論
	創造性・活動・奉仕

(※)「文学と演劇」はグループ1と6の横断科目、「環境システムと社会」はグループ3と4の横断科目となっている。

IB 機構 (2015a) より作成

の結果、2013年度から DP 科目の一部を日本語でも実施可能となり、2015年4月以降は日本語 DP 課程を実施している。DPのカリキュラムは、表3の通り6つのグループ(教科)及びコアと呼ばれる3つの必修要件から構成されている。現在、日本語で実施可能なのは、表3の□で囲った科目となっている。生徒は、各グループから1科目ずつ選択し、6科目を2年間で学習するが、芸術(グループ6)は他のグループの科目に変更することも可能となっている。卒業後の知識・スキルを得るという観点から、6科目中3～4科目を上級レベル(HL:240時間)、その他を標準レベル(SL:150時間)で学ぶ。また、IBプログラムの柱となるコア科目として、知識の理論(Theory of Knowledge: 以下 TOK)、課題論文(Extended Essay: 以下 EE)、創造性・活動・奉仕(Creativity, Activity & Service: 以下 CAS)の3科目を修了する必要がある。

3つのコア科目は、IBの教育理念である全人教育や探究型学習を具現化しているため、DPの中で特徴的かつ重要な科目となっている。EEは、生徒が関心のある研究分野について個人研究に取り組み、研究成果を4,000語(日本語の場合は8,000字)の論文にまとめていく。TOKでは、知識の本質について考え、知識の構築に関する問いを探究することで批判的思考を培い、生徒が自分なりの物の見方や他人との違いを自覚できることを習得する。CASでは、創造的思考を伴う芸術活動、身体的活動、無報酬での自発的な交流活動といった体験的学習に取り組む。

3-4. DPの評価方法

IB資格の取得には、DPのカリキュラムを6科目履修した上で外部評価(IB試験)を受ける必要がある。各科目7点満点で7点×6科目=42点、コア科目はTOKとEEの評価の組み合わせにより最大3点が加算され、合計45点満点となっている。IB試験は、南半球と北半球の学校年度に対応できるよう年2回世界で一斉に実施される。日本の一条校の場合は、原則として3年次の11月に実施され、翌年1月5日に試験結果が通知される。国内外の大学をIB資格で受験するためには、各大学で設定している受験可能なIB資格の点数を満たしている必要がある。

DPの評価方法で特徴的なのが、IBで重視される3つのコア科目の点数が少ない点である。6グループの各科目は7点満点なのに対し、TOKとEEの合計が最大3点、CASに至っては点数化されない仕組みとなっている。点数化されないCASがコア科目の1つとしてDPの必修科目に置かれていることから、CASがIBプログラムの柱であり、IBの教育理念を具現化する重要な科目となっていることが分かる。

4 CASについて

4-1. CASの変遷

1968年にIB成立当初、DPの中で週1回午後「芸術の理論的かつ実践的入門」という必修科目として始められたのがCASの基礎となっている。その後、1970年に「身体的及び社会的奉仕活動」が加えられた(Hill 2010:80)。CASは、美的(創造的なこと)・身体的(ス

スポーツや運動など）・社会的（学内外を問わない奉仕活動）に関わることに重点を置き、学術的達成度の認知のみならず全人教育に貢献することの重要性を示している。1980年には、創造的・美的・社会的奉仕活動を実践すること（creative and aestheric activity, and social service：以下 CASS）と示されるようになり、さらに1989年に CASS から CAS へ名称変更され、その後現在まで CAS として実践されている（Hill 2010：82）。

IB 成立当初から実践されている CAS は、現在に至るまで活動内容は緩やかに変化しているが、知識・スキルの習得だけではなく、全人教育を基盤としたバランスの良い人材育成を目指しており、IB には欠かせない科目となっている。

4-2. CAS の活動内容について

CAS 活動は、①1回で完結する CAS 活動、②継続的に行われる CAS 活動、③18ヶ月の間に必ず行わなければならないもの（他者と実行し、構想から実行まで1カ月ほどで行う）、のすべてを行う必要があるため、1回で完結する活動と継続的に行う活動の両方を計画し実践する必要がある。さらに創造性・活動・奉仕の3つの要素から1つ（一度に複数を含むことも可）に密接した活動であることが求められ、以下の条件を満たす必要もある。

- ・CAS の要素の少なくともいずれか1つに該当する。
- ・生徒自身の興味、スキル、才能、または成長の機会に即している。
- ・「IB の学習者像」の人物像を養う機会となる。
- ・DP の必須要件には含まれておらず、その目的で使用されないことがない。

日本の学校でいえば、部活動や委員会活動も CAS 活動を行う条件に見合えば、CAS 活動の1つとして活用できる。

創造性とは、自分で創ったあるいは自分で解釈を加えた創作作品や公演に通じるアイデアを探究し、広げるこ

とを意味する。音楽、演劇、映画、デザイン技術、美術、ダンス、ファッションなど、創造的に考えることを必要とする活動のことで、壁画製作の計画、合唱団に加わる、ファッションのデザインに取り組むなどの事例があげられる。

活動とは、健康的な生活を送るための身体活動のことで、新しいスポーツに挑戦したり、運動能力を高めたりする活動を意味する。事例として、スポーツチームをつくり、練習を重ねた上で他チームとの試合に臨むなどがあげられる。

奉仕は、コミュニティのニーズを調査し、関係者すべての権利、尊厳、自由を尊重する行動計画を立て、実践することである。高齢者のために朗読する、助けを必要としている人々のためのチューター・サービスを企画し提供するなどの事例がある。

3つの要素それぞれに対応する活動が必要なため、1つの要素に1つの活動を3つ計画することもあれば、恵まれない子どもたちのためのスポーツイベントを開催するといった企画であれば2つの要素（活動と奉仕）、地域内の高齢者施設に住む人々のためのダンスパフォーマンスを創作し、練習し披露する活動であれば3つの要素（創造性+活動+奉仕）を包含した取組となる。計画し実行された CAS 活動の学習成果として、表4にある7つの項目が期待されている。

また、生徒が CAS 活動を行うにあたり、以下の項目を実施することも求められる。

- ・CAS の体験の開始段階において自己点検し、CAS プログラムを通じて何を達成したいか、自分自身の目標を設定すること。
- ・「調査」「探究」「活動」「振り返り」を実施すること。
- ・定められた時期に CAS アドバイザーと面談を行うこと。
- ・18ヶ月間途切れることなく、多岐にわたる活動に参加すること。自らが開始した「CAS プロジェクト」を最低1つ含むこと。

表4 CAS 活動の7つの学習成果

学習成果1	自分の長所を理解し、これから個人として成長していくべき分野を特定する。
学習効果2	課題に挑戦し、その過程で新しいスキルを習得したことを実証する。
学習効果3	CAS 活動を自ら計画し開始する方法を示す。
学習効果4	CAS 活動を継続し、やり遂げる粘り強さを示す。
学習効果5	他の人と協働するスキルを実証し、その意義を認識する。
学習効果6	グローバルな意義のある問題への取り組みを示す。
学習効果7	選択と行動の理論的な側面を意識し、それについてよく考える。

IB 機構（2015b）より引用

- ・取り組んだ主な活動のリストと共に活動とその成果をCASポートフォリオに記録すること。
- ・7つの学習成果を達成した証拠を示すこと。

ここでいうCASアドバイザーとは、生徒一人ひとりにCAS活動全体のアドバイス・サポートを行う教員のこと、通常クラス担任や学年担当教員が担う。CASは18ヶ月間続けるため、どのようなCAS活動を計画するか検討することから始め、調査や下調べを行い、活動計画を立て、活動の実施、振り返りおよびフィードバック、報告書を作成するまでが一連の流れとなっている。

5 特別活動とCASの共通点および相違点

特別活動とCASは、両者とも体験的学習を通して協働性や他者を尊敬・受容することを目指し、全人教育を柱として思いやりや信念をもち、バランスのとれた人間形成を育むことを目的とした活動である。また、両者とも教科外活動で点数化されないが卒業要件となっている点も共通しており、両者が生徒の人間形成に重要な活動

であることは明らかである。しかしながら、表5で比較してみると主に3点の相違点がみられる。

第一に、授業時間数の違いである。特別活動は、原則として年間35時間以上だが、CASは週3時間を18ヶ月続けることが定められており、単純計算すると約216時間となる。特別活動は基本的にホームルーム活動、生徒会活動、学校行事に限定されるため、文化祭や体育祭といった活動の大枠はすでに決まっているが、CASでは活動内容を計画するところから始まる。生徒は、CAS活動中に進捗状況の確認や指導を受けるため、CASアドバイザーと3回の面談を行うことが求められる。また、創造性・活動・奉仕の3つの要素を取り入れ、1回で完結する活動と継続的に行う活動を実施するため、特別活動に比べ多くの時間を要する。

第二に、目標についてである。特別活動では、人間関係の形成といった集団に焦点をあてているが、CASでは自己の成長を客観的に認識できるようになることを目指している。両者とも点数化されることはないが、CASを行う生徒はすべて7つの学びの成果を達成したことを

表5 特別活動とCASの概要

	特別活動	CAS
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。 ・集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意志決定したりすることができるようになる。 ・自主的、実践的な集団行動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広いCAS活動を楽しみ、その重要性を認識する。 ・目的意識をもって、自分の経験を振り返る。 ・目標を設定し、効果的な方法を模索し、自分の成長のために必要な行動を見極める。 ・新しい可能性を探り、新しい挑戦を歓迎し、新しい役割に順応する。 ・計画的、持続的、かつ他者と共に活動するCASのプロジェクトに積極的に参加する。 ・地域や世界のコミュニティの一員として、他の人や環境に対して責任を負っていることを理解する。
授業時数	原則として年間35時間以上 (児童会活動・生徒会活動・クラブ活動及び学校行事の内容に応じ、年間、学期ごと、月ごとなどに適切な時間時数を充てる。)	高等学校2-3年生の2年間で週3時間程度、18ヶ月間
該当する活動	ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事	創造性・活動・奉仕に関わる活動 (生徒自身で計画する活動1回で完結する活動と継続的に行う活動)
評価	なし	なし(ポートフォリオや活動報告書の提出が必須)

IB機構(2015b)及び文部科学省(2018)より作成

示す根拠として、CAS ポートフォリオに記録を完成させることが求められる。桐生（2017）は、CAS 活動をほとんど何もしないまま時間が過ぎ、DP 修了直前に慌てて活動する生徒がいると述べているが、3 回の面談やポートフォリオの提出が求められるため、桐生が指摘するような生徒の割合は比較的少ないことが予想される。特別活動の場合、成果物を提出することは求められていない。学習指導要領解説では、特別活動における評価について「生徒一人一人が、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりできるようにすることができるようなポートフォリオ的な教材などを活用して、自己評価や相互評価するなどの工夫が求められる。」（文部科学省 2018：127）と書かれているが、具体的な評価規準や達成目標は示されていない。そのため、担当教員の特別活動に対する理解や技量により学びの深さが異なる可能性が高い。

第三に、CAS はグローバルな意義のある問題を意識して活動を行う必要がある点である。特別活動は学内での集団に焦点をあてているため、グローバルよりローカルな視点で活動するのが基本である。一方、IB は多国籍な環境から創設されたプログラムのため、グローバルな視点を重視しており、CAS の 7 つの学習成果の中にも含まれている。常にグローバルとローカルの両方を意識しながら異文化理解や協働性を養う学びが特徴となっている。

6 CAS からみる特別活動への示唆

毎回、PISA 調査の結果が出るたびに参加国は一喜一憂し、教育方針を軌道修正する傾向がある。調査結果が悪ければ教科の学習時間数を増やすことが推奨され、教科外学習時間が減少する可能性が高い。しかし、人間関係形成・社会参画・自己実現を踏まえた特別活動は、生徒が社会に出てから必要となる他者との違いの受容や協調性など、様々な能力を育むために重要な学びの機会である。大谷（2017）が指摘しているように、教科の学習時間数を増やすことにのみ注力するのではなく、教科外学習時間も確保することが望まれる。集団や社会から学ぶ全人的な教育を通して、教科の学習では得られない自主性や協働性を育むことは、教科の学習同様に重視されるべきである。

特別活動は点数化されないため、磯島（2014）の指摘にある、生徒は特別活動の定義を十分に理解できていないまま、何気なくホームルーム活動や生徒会活動、学校行事に参加し、活動に参加している可能性が高い。そこで、CAS 活動のように活動内容や学習成果を明確化し、学びの成果を可視化することで特別活動の意義や目標を

生徒が十分理解し、自分のやるべき活動に目的をもって自主的に臨むことが期待される。また、生徒会活動や学校行事での学びを記録し発表することで活動を振り返り、学びを深めるような試みも必要だろう。

また、渋谷（2013）が提案しているように、特別活動の活動内容をホームルーム活動、生徒会活動、学校行事といった校内活動に限定せず、校外及び地域に範囲を広げ、実社会や地域と関連づけた活動を行うことが期待される。また、現代のグローバル社会に鑑み、グローバルとローカルの視点をもった活動内容を試み、幅広い視野をもつ生徒の育成が期待される。

7 おわりに

本稿では、特別活動と CAS を学びの目標や評価方法に注目して比較し、CAS には目指す学習成果が明確に出されていることや、生徒が学習成果を可視化するツールがあることが確認された。CAS では、生徒が何のために活動を計画し実行するのか、どのような視点を求められているのか分かりやすく、生徒 1 人ひとりの得意分野を活かした活動を計画・実行しやすい仕組みになっていること、ポートフォリオを作成することで学びを可視化でき、生徒が自身の成長過程を確認できる仕組みであることが明らかとなった。これらの仕組みを特別活動に取り入れることで、生徒が明確な目標をもって活動に臨めることが期待される。

今回は『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説特別活動編』と『『創造性・活動・奉仕』（CAS）の手引き』の比較にとどまったが、次回は CAS を経験した生徒への聞き取り調査を通して、CAS の有効性について明らかにしていきたい。

【文献】

- 磯島秀樹（2014）特別活動のあり方についての一考察. プール学院大学研究紀要, 55, 153-167.
- 遠藤忠（2019）高等学校・特別活動の可能性、問題、課題— 個性的存在としての人間を育てる—. 日本特別活動学会紀要, 27, 1-6.
- 大谷猛夫（2017）中学・高校の特別活動の現状と課題. 大東文化大学教職課程センター紀要, 2, 7-12.
- 城戸茂（2018）中学校特別活動への期待と実践課題. 日本特別活動学会紀要, 26, 21-26.
- 桐生朋文（2017）一条校における「創造性・活動・奉仕」（CAS）活動の効果的導入に向けた実践事例. 国際バカロレア教育研究, 1, 47-56.
- 渋谷真樹（2013）日本の中等教育における国際バカロレア導入の利点と課題—特別活動に着目して—. 奈良教育大学

教育実践開発センター研究紀要, 22, 87-94.

渋谷真樹 (2014) 教科外活動におけるグローバル能力の育成: 国際バカロレア・ディプロマ・プログラムの「創造・活動・奉仕」に着目して. 奈良教育大学教育実践センター研究紀要, 23, 31-39.

末永ひみ子 (2010) 特別活動と人間関係育成に関する一考察—多文化社会を生きる子どもたちの視点から—. 日本特別活動学会紀要, 18, 40-49.

杉田洋 (2018) エジプトでの TOKKATSU の現状と可能性. 日本特別活動学会紀要, 26, 1-7.

文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 特別活動編. 東京書籍

矢野裕俊 (2012) 国際バカロレアとの比較をとおしてみた高等学校教育課程の現状と問題点. 武庫川女子大学大学院教育学研究論集, 7, 27-34.

山田真紀 (2023) 特別活動の海外展開—エジプト・インドネシア・モンゴルでの TOKKATSU の実践を中心に—. 椋山女学園大学研究論集, 54, 201-221.

A.D.C. Peterson (1987) *Schools Across Frontiers: The Story of the International Baccalaureate and the United World Colleges*. Open Court Pub. Co.

Ian Hill (2010) *The International Schools Journal Compendium volume IV: The International Baccalaureate : pioneering in education*. A John Catt Publication

International Baccalaureate Organization (2015a) 国際バカロレア (IB) の教育とは?. International Baccalaureate Organization (UK) Ltd.

International Baccalaureate Organization (2015b) 「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き. International Baccalaureate Organization (UK) Ltd.